

にしたところが大きい。呑み込んだまま、肺にしばらくとどめている感じだ。なぜそんなことをするのかは分からないが、肉体的な切実感には伝わってくる。

母親と姉の介護をする人の話聞きたり蚊を払いつつ
山口ゆかり

国政調査員として家庭訪問をした折の一連。感情表現をカットして、ドキュメントふうにしたんと表現して、リアルな味を出している。現場はそれにしても大変らしい。門前払いを食わされたり、愚痴を聞かされたり。この作でも、話を聞かされている時間の長さ、他人にとってはまったくの関心外の話の内容が読者に読みとれる。表現的に工夫されているからである。

友人の部屋で笑えば錆び付いたはてなフックを天井にみる
佐佐木定綱

「笑えば」は、呵々大笑して顔をのけぞらせたイメージなのか、反対に苦笑しながらなんとはなしに天井を見たイメージなのか。「？」型のフックだけでは分からない。もう一つ、読者を誘導し、読みを方向づける何かが必要だったろう。

宇治橋の鳥居新しつやつやしいまだ多くは撫でられ
上田芳霞

昨年立て替えられた伊勢神宮の宇治橋の鳥居である。遠景ではなく、参拝者が手で撫でる撫でないが分かるほどの至近距離をクローズアップしたことで、ユーモラスな味が出た。

上品に剪定されて退屈な金木犀の小さなあくび

森屋めぐみ

金木犀を擬人化して、意外な一首にしあげている。なるほどと感心した。植木屋に手入れされた金木犀。一般的な視点、人間的、日本人的基準でみればさっぱりすつきりしたと見えるが、類型的、退屈と見る見方もあるだろう。それを、金木犀の視点を借りて一首にしたアイディアはなかなか。

白墨を使わず授業を進めゆく電子黒板導入されぬ
柴山与志朗

便利になったとも、これまでと違つてとまどっているとも言わずに、事実だけをたんとんと叙述したことで、白墨を使っていた昨日までの教室が読者の心に広がることになった。打ち消すことで現す方法、有名な藤原定家の一首、「見渡せば花も紅葉もなかりけり……」と同様である。

モニターの胎児を姉と姉になる少女ら真面目にのぞきこみぬ
宮原千晶

「姉と姉になる少女」という言い回しの面白さがポイント。二人が顔を寄せ合つてモニター画面を見つめている場面が目につかぶ。ただ「少女ら」の「ら」は不要。母となるをみなに海のあることを 羊水かたむけ方
フエにて語る
佐藤モニカ

上句がいい。読者は上句を読んで下句を大いに期待する。挑発される。しかし下句、期待をまるごと受け止めるには、跳躍力がやや不足か。「海」と「羊水」のイメージが近すぎるのだと思う。